

漱石論集成 柄谷行人 著

「マルクスを読むように漱石を読んできた」と自ら語るように、漱石はつねに柄谷行人の思考の原点であり続けてきた。群像新人文学賞を受賞した代表作「意識と自然」(1969年)から90年代に至るまでの著者の漱石に関する評論、講演録、エッセイ等を集め、その思考の軌跡をたどる。多面的な切り口からせまる、漱石論の決定版。

漱石試論 I

意識と自然
内側から見た生
階級について
文学について

漱石試論 II

漱石とジャンル
漱石と「文」

漱石試論 III

詩と死——子規から漱石へ
漱石の作品世界

作品解説

『門』
『草枕』
『それから』
『三四郎』
『明暗』
『虞美人草』
『彼岸過迄』
『道草』

講演その他

漱石の多様性 講演——『こゝろ』をめぐって
淋しい「昭和の精神」

漱石とカント

岩波現代文庫版あとがき

初出一覧

本書は、哲学者であり、文学者、さらには文芸評論家としても知られる柄谷行人氏による夏目漱石に関わる評論、講演、エッセイなどを収録したものです。著者の「行人」という筆名は夏目漱石の同名作品によるとも言われるくらい夏目漱石の愛読家でもあります。同書には、「意識と自然」、「内側から見た生」、「階級について」、「文学について」、「漱石とジャンル」、「漱石とく文」、「詩と死—子規から漱石へ」、「漱石の作品世界」などの評論が収録されていると同時に、漱石の代表作、『門』、『草枕』、『それから』、『三四郎』、『明暗』、『虞美人草』、『彼岸過迄』、『道草』などが解説されています。柄谷氏の漱石への想い、漱石を通じた社会観が見えてきます！

柄谷行人「漱石論集成」

漱石作品の批評集。

漱石小説において、他者との葛藤が提示され、他者との関係では解決できない自己の問題に転換され、自殺か宗教か狂気かで終わる～漱石は表象、言語化できないものを言語化しようとした

従前の漱石論とは異なる視点

- * 漱石作品を「明暗」を頂点とする発展過程として読むべきでない
- * 初期と後期を区分しない～漱石の文学観は変わらない
- * 則天去私の境地は単なる神話にすぎない
- * 漱石が三角関係を経験したか否かは関係ない～漱石は あらゆる愛は三角関係にあると考えているだけ
- * 漱石は 近代小説に適応しなかった～漱石は 小説より文(写生文)を書き続けた

漱石は何を見て、何を考えていたか

- * 心理や意識を超えた現実
- * 私はどこから来て、どこへ行くのか～自己を他者としてでなく、自己の内側からみようとするとする
- * 自己存在の無根拠性

夏目漱石は、言わずと知れた世界に誇る日本の作家である。漱石の作品や思想は、日本文学の中でも、先行研究が最も膨大になされてきた作家だ。「文学研究」というと、一般的には作中を丹念に分析しながら作品世界を深く追究する作品論や、作家の生育環境・心理状態など様々な要因から作品へと迫る作家論、原稿の変更・改訂などから作品の本文そのものがどのような変遷を遂げてきたのかを追跡する書誌論などが主流であった。しかし、こうした漱石文学研究とは一線を画すアプローチを展開する思想家が現れた。それが、今回取り上げる柄谷行人『漱石論集成』である。

具体的にどのような点が従来のアプローチとは異なっており、画期的かという点、漱石の思想を超えた「意識」への接近を試み、漱石自身が抱いていた「夢」や「恐怖」が作品にどのように反映されているかを、つぶさに論じているということが挙げられる。漱石の作品群は『吾輩は猫である』から始まり『明暗』(未完)で終結するのだが、一般には作品を執筆するごとに内省が深化してゆくところに、漱石の作家としての成長を見ることができると論じられる傾向にある。しかしながら柄谷は、例えば『行人』や『明暗』などの後期作品群にも、初期作品(この呼称も柄谷は否定するのだが)の『夢十夜』における「正体の知れない」「不安感」や「夢」心地で世界を徘徊するという要素が見られると指摘する。すなわち、作品は『明暗』を「到達」点として徐々にディベロップしていったのではなく、漱石の文学体系の集大成である『文学論』構想・執筆の段階からすでに彼自身で文学・小説の在り方が定まっており、それを多様な「ジャンル」を描くことで表現したのだということを、柄谷は強く主張する。

上述のことを象徴的に表す「『こゝろ』は人間のエゴイズムとエゴイズムの確執などというテーマとは実は無縁である」(三〇-三一)という一文は、私にとっても衝撃であった。『こゝろ』は、高等学校国語科の中で長らく代表的な教科書教材として君臨し、近代知識人の苦悩とエゴイズム、それらが「自殺」という行為へと収斂されてゆく先生の罪業の深さがテーマであるという教訓じみたものが、『こゝろ』の単元の終結であった。少なくとも、私は自身の体験を振り返りそう記憶している。しかしそれは早計であり、漱石は人間の心理が過剰に見えていた「ゆえに見えない何ものか」つまり「心理や意識をこえた現実」に「畏怖」し見つめていたのだという柄谷の指摘は、今後の国語科教育の中でも見過ごすことができないものとなるだろう。

一方、本著は画期的である反面、漱石について初めて学術的に触れようとする読者にとっては、少々理解することが困難な構造となっている点は、現段階では私にとっては唯一の欠点である。漱石の作品群を「小説の観点で読むではない」(一九四頁)という部分は、読者側にある程度の知識が備わっていなければ、解読することす

ら相当の時間を要すると思われる。

とはいえ、柄谷の各種の論点は非常に鋭利であり、緊張感と共に再度漱石の世界を味わうための、格好の導入書であると断言できる。

思考の導きの糸として漱石を読む～『増補 漱石論集成』

●柄谷行人著『増補 漱石論集成』／平凡社／2001年8月発行

思考の導きの糸として漱石を読む～『増補 漱石論集成』_b0072887_17452141.jpg 柄谷行人の『漱石論集成』は一九九二年、第三文明社から刊行された。本書はその文庫本化だが、原著には収録されていなかった未完の論文が二篇追加され、それと引き換えに漱石を直接に主題としているわけではない文章の一部が削られた。基本的には著者が漱石について書いた文章のほぼすべてがここに収められていると考えて良いだろう。

私の記憶に誤りがなければ、柄谷が日本の作家の固有名をタイトルに冠した書物を出しているのは『坂口安吾と中上健次』以外には、本書をおいて他にない。また中断があったとはいえ、これほど長い期間にわたり一人の作家をめぐる文章を書いているのも珍しいのではないか。本書をあらためて通読してみて、柄谷の漱石読解はあくまで文学の次元において徹底されているがゆえに深味をもっているということを再認識することとなった。

柄谷は、ノースロップ・フライのジャンル論に言及しながら、漱石が彼の分類したすべてのジャンルを書き分けていたことを再三指摘している。サタイアとしての《吾輩は猫である》、ロマンスとしての《漾虚集》、ピカレスクとしての《坊っちゃん》、告白としての《こころ》……。さらに、俳句や漢詩なども書いた。

用語は必ずしもフライの分類に対応しているわけではないが、いずれにせよ漱石が創作を始めた初期の段階から実に多彩なジャンルの作品に挑戦していたことはたしかである。

これは漱石の文才や器用さを意味しているのではない。むしろ「逆に近代小説という観点からみれば、それに適応できなかった、あるいは適応しようとしなかった漱石の不器用さを意味している」。

漱石自身は一連の作品を「(写生)文」として書いた。漱石は「文」を「小説」に向かうべき萌芽としてでなく、積極的に「小説」に反するものとして自覚していた。

日本の近代文学は一九世紀のフランス文学を規範として成立したのだが、その過程で多くのものが捨象されることとなった。柄谷によれば、諸ジャンルの消滅と近代文学の成立は同義である。漱石は近代文学が斥けたもののなかに可能性を見出したともいえる。つま

り漱石にとって「文」とはあらゆる可能性を含む「零度」としてあったのだ。

漱石の作品については、精神病理学的な見地から漱石自身の病を類推するような論考も少なからず書かれてきた。それは当然ながら個々の作品の叙述内容を問題とするものだが、柄谷が重視するのは漱石の方法である。

……漱石の場合、その作品の内容として「病」が書かれているのではなく、写生文という形式そのものが「病」の発現であり、同時にその治癒なのだというべきである。(p403～404)

漱石が執拗に描こうとした三角関係をめぐる洞察も卓抜なものを感じさせる。

フロイトが人間の原体験として取りだしたエディプス・コンプレックスは、いうまでもなく三角関係である。それは、人間が誰でも三角関係を経験するというよりも、他人との「関係」そのものが三角関係において可能だということを意味している。

漱石の《門》以降における三角関係の把握も、恋愛または人間の「関係」はもともと三角関係としてあるのではないかと感じさせる程度に深化したものだ、と柄谷はいう。《こころ》における先生の愛もまた、それじたいが三角関係によって形成されたといえる。

そうした認識は、さらに「われわれにとって直接的（無媒介的）であると見えるわれわれの意識・欲望が、すでに他者によって媒介されたものである」として一般化され、漱石の一見ウジウジとした男女の三角関係は、思いのほかラディカルな人間社会の原像として眼前にひらけてくるのだ。

ところで、《こころ》について私は当ブログのエントリーで、「先生」と「私」との関係に同性愛を見出した島田雅彦の読解を極めて独創的であるかのように引用してしまったのだが、そうした読みは心理学者の間ではありふれたものらしい。島田もおそらくそのいくつかを読んでいたのだろう。

すでに膨大な研究論文の蓄積されている漱石のような作家については、私のような素人が訳知り顔で軽々しく書かない方が良く、ということを感じさせられた次第である。

(散歩に読書、ぶらーり散策！！ 道草旅)

学究に青春というものがあるとしたらたぶんここにある。今となつては、「古典」になつてしまった柄谷だが、本書を読めば漱石研究史が刷新されるときその衝撃の瞬間に立ち会うことができる。いかに漱石テキストが現実界＝リアル＝他者を抱えこんでいたか。い

かにそれが近代的自我によって蹴落とされてきたかが柄谷によってテケツされていく。
インターテキストの時代において、夏目漱石は明らかに柄谷行人の漱石論を読んで／読ま
され、そのエクリチュールに変容を迫られている。

(散歩に読書、ぶらーり散策！！ 道草旅)